

追悼号 市民プレス

平成30年
(2018年)
12月11日

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(30)485502
〒353-0004
埼玉県志木市本町2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com



市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
<http://shimin.camelianet.com>

「市民プレス」電子版(無料)を公開しました
<http://pr-shimin.camelianet.com>
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
地元で敬愛された実業家・・・
原温代さんを偲ぶ
小石川で生まれ、志木の原家に嫁した。
東京薬科大学女子部に就学、彼女が大切に所蔵していた卒業アルバムから
- PAGE 2
原温代さんが代表を務めていた株式会社
ダイナミック・システム・デザイン研究所
Dynamic System Design Insititute
(DSD)の沿革
- PAGE 3
子供の頃は戦争があった。宮城県鳴子町
に疎開する

地元で敬愛された実業家・・・ 原温代さんを偲ぶ

去る十月十一日早朝、志木市本町五丁目十九ー十五、「アドリア・フレスカ」ビルに本社を置く、株式会社ダイナミック・システム・デザイン研究所代表取締役の原温代さんが亡くなった。

原温代さんは、東京小石川、不破家の長女として生まれる。薬学士、薬剤師として、六十年余り以前、池袋から川越に向かう、東武東上線沿線に所在する志木(そのころは「足立町」)の原家の長男、昭二に嫁した。当時の志木を縦貫する「本町通り」は砂利道で、原家の前を野火止用水が流れていた。

一方、温代さんの生家の在る現・小日向(現・文京区)には、明治のころ、内閣総理大臣、鳩山一郎が邸宅(現・「鳩山会館」)を構え、かつては、江戸上屋敷の街として知られる。徳川家康が江戸城に入り、多くの武家屋敷が作られた。温代さんの生家は「音羽御殿」として知られる、現・

鳩山会館の近くに在って、広い庭園は子供達の遊び場だった。

温代さんは、地元の小学校、中学校を卒業、都立高校を経て、台東区上野桜木町に所在した東京薬科大学女子部に就学した。彼女が大切に所蔵していた、卒業アルバムから、以下、その一部を転載して、当時の学生生活を垣間見るとにしたい。

東京薬大女子部長 寺坂正信先生

卒業証書をもった不破温代さん



彼女が専攻した微生物学の渡部先生



薬化学の加藤先生



生化学の三橋先生



地学の秋間哲夫先生



ドイツ語の中山先生

薬化学の小林五郎先生



薬品製造化学の伴良雄先生

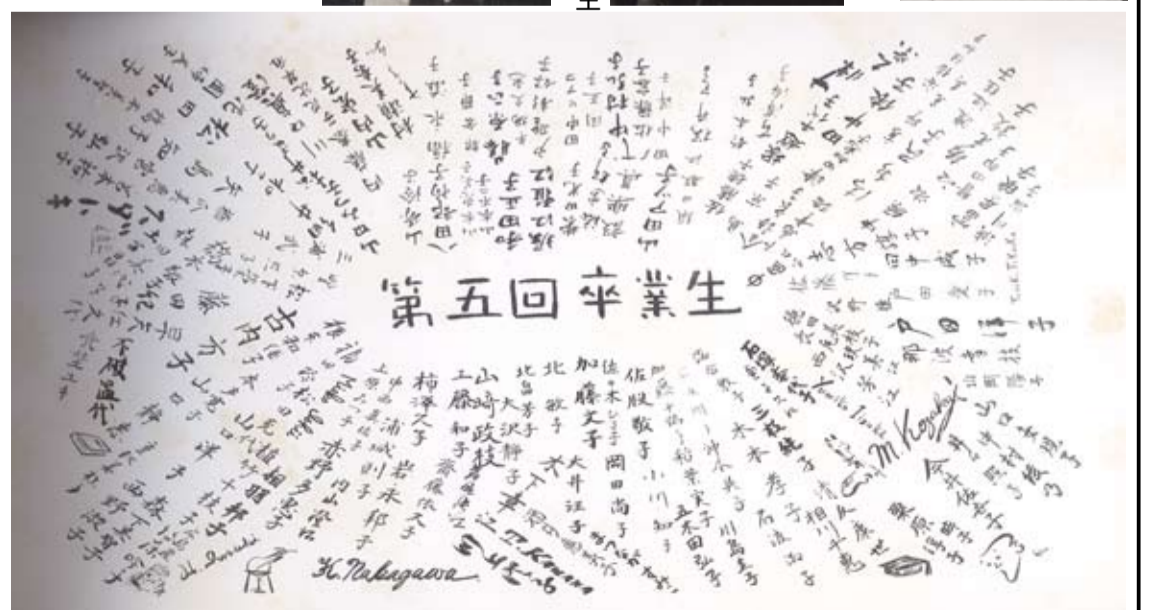


裁判化学の奥井誠一先生



クラスメートの皆さん

言問通りに面した
上野桜木町の
校舎と玄関



原温代さんが代表を務めていた株式会社ダイナミック・システム・デザイン研究所 Dynamic System Design Institute (DSD) の沿革を振り返ってみたい(2001年8平成十三年)三月に公開された資料から)

●教育・研究、開発のシステム化を目指して

原 昭二(現・代表取締役)が発起人となり、辻 章夫(昭和大学教授、紫綬褒賞受賞者)他、和大学教授、産業界の有力者8名によって、昭和56年(1981年)2月に設立された。その当時、官学の職員には、民間企業の設立は禁じられていたので、非国立、非官学だけのメンバーだった。

その後四十年近くを経た現代から思えば、当たり前のベンチャー企業として、特別、斬新な味わいは感じられないが、当時は、官界では「禁じ手」とも云える組織だった。

●同研究機関は、システム構築に関連した多くの新技術に取り組み、有機合成の自動化、遺伝子工学関連の発明などを確立して、特許を出願した。

しかし、基幹となる特許の取得、実用化を成功させるには至らなかった。

●平成の時代となり、株主会の意向によって、しからば、新たな資金を導入し、発起人(原)は、新たな道を求め、新規の事業をスタートした。

●ここに新事業として、「メディア事業部」が誕生し、創業時の目標を達成することとなる。創業者の原 昭二は、勤務していた東京薬科大学を定年退職し、親から相続した不動産を資産運

用する必要にも迫られた。金融、不動産業者によると、この土地はマンションまたはゲームセンター、パチンコ店などの適地と、当初、マンション建設計画とパチンコ店などのテナント探しからスタートした。

その過程で、パチンコ業界の首位企業である「(株)平和」および優良な建築、設計で知られる「(株)タック」などの支援、さらに以前からこの土地を駐車場として使用していた「東京信用金庫」の財政支援により、新規事業として、「アミューズメント事業部」がスタートした。

●メディア事業部の運営
一方、創業者が、相続で引き継いだ有限会社朝日屋原薬局所有の、文京区本郷五丁目目所在する、「朝日ビル(菊坂回廊)」(地下に用水ポンプ室、エレベーターを設備し、1階には事務室、事務用机、椅子など設置)を賃借した。2階、セミナー室、机、椅子、スクリーン、液晶プロジェクター、3階、居住用、4階、演奏会用ピアノ、写真撮影用スタジオとして使用する。屋上は休憩施設で、BS、FMアンテナを設置した。

●パソコンスクール&ラボを開設し、セミナーを運営し、我が国では初めてとなる、インターネットをスタートさせ、その設備の充実に努めた。

「秋葉原」で部品を調達し、都心に位置することは、最先端の技術レベルで活動する基礎となった。

●備品:取材用ビデオカメラ、再生、デジタル化基板、ソフト、編集用パソコン、周辺機器

受講生を募集し、また雑誌「マ イレックス」などに広告を掲出した。

優秀な受講生を「スクーラメイト」としてスタッフに登用した。現在も有力なスタッフの一人として働いている方もいて、最高レベルの技術力を行使している。

●セミナーの開催

当社は開設当時は、日本化学会の「情報化学部会」、日本薬学会の「情報薬学会」のプロジェクトを協賛し、コンテンツの使用許諾、著作使用の面で制作上有利な立場を確保してきた。

●パーソナルコンピュータ入門、インターネット入門などのセミナー、コンピュータを用いる薬品創製(創業)、技術講座などの企画運営に当り、これら

記録することによって、質の高い電子メディアの制作も行った。

平成8年7月 「Windows 95 および インターネット入門」
平成8年9月 モレキュラー・モデリング、超入門

平成9年2月 コンピケム&HIT スクリーニングはこれからどうなる?

CD-ROM「情報薬学はいま」シリーズを完成して、頒布した。その内容は、医薬品の創製技術として最新のものです、高い評価を得た。

電子ブックの制作、記録事業として、CD-ROMの電子ブックの他、記録、ドキュメンタリーの制作態勢を整えた。

サーバー、LANの構築
将来もっとも有力とされる「Linux」によりサーバーを構築、インターネット、LANシステムを整備した。このシステムのコンテンツとしてホームページ(ウェブサイト)の制作、経営支援システムを構築した。パチンコ点「アドリア」のホー



「アドリア・フレスカ」
1階はコンビニのローソン本町店

「カメラア」、1階は児童福祉のハビープラス、交通事故者を緊急に治療する整形外科

ルコンピュータのデータを取り込み、営業管理、来客データを外部でも見られるWEBシステムを完成した。

●不動産賃貸事業部に進出する

遺憾乍ら、既述した、志木市本町五丁目目所在する、「アミューズメント事業部」の運営は軌道に乗せることができなかつたが、幸いにも、平成12年2月、大規模な、東上線志木駅、駅前の都市計画が完成し、事業環境が好転した。

歩いて、駅から二、三分と云う好立地を生かして、平成25年、コンビニ、医療、賃貸用住居の複合ビル、「アドリア・フレスカ」が創業者によって建設され、当社は、不動産賃貸事業に進出した。

●続いて平成29年、第2ビル「カメラア」が建設された。1階は、児童福祉、交通事故に備えた医療機関、二階から六階ま

温代さんが亡くなるまで愛用したイエローの日産「フェアレディー」



での賃貸用住居とが複合したビルで、駐車場を備える。

話題は再び戻って、都内の小石川から、薬学を修めた温代さんが志木に嫁したころの話になる。

志木市を縦貫する本町大通りはまだ砂利道で、本町二丁目の朝日屋原薬局の前には、用水が流れていた、江戸時代からの野火止用水、伊豆殿堀である。いわば田舎のまち、志木に嫁いだ温代さんは、初めての自転車を使したが、間もなく、志木駅近くで自動車に追突され、大怪我を負った。それなら自ら車で走ろう、と決意して、自動車に乗って、更なる行動を期したのである。運転免許を取得するため、当時和光市の駅前に在った教習所に通う。

免許を取得したころ、未だ国産の自動車は製造されていない。英国製のオースチンを見つけて購入する。

やがて、国産のブルーバードがお目見えしたが、車の国産化は進み、「旗は日の丸、車は日産」に魅せられて、プリンス自動車を吸収合併した第一号の「グロリア」に乗り換える。

やがてスポーツカーの代表、日産「フェアレディー」へ。何世代かの同車を持ち換え、イエローの「フェアレディー」を亡くなるまで運転した。

以上、ここに記したのは、残念乍ら、彼女の人生のほんの一部に過ぎず、履歴書さえ残すことさえできないことを、私は恥じています。

皆様にお願ひ

この追悼号は、今後、常に書き加え、修正して、かつて、彼女と交遊された記憶を蘇られさせて下さい。

つぎの私、原 昭二 の連絡先に、メール、電話、何でも結構です。メールは hara@camelianet.com 電話は 090-3048-5502

この追悼号は、何度も、何度も、何度も、コンテンツ、写真などを増やしてゆきたいのです。従って3、4頁は空白のまま、発信致します。

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。 TEL 090 (3048) 5502 編集部原宛にどうぞ

原温代さんの履歴書

- ・昭和10年3月11日 東京小石川に生まれる
- ・昭和16年 小石川関口台町国民学校(戦時体制に即応した国家主義的な教育を行う為に、従来の「小学校」を改称した)に入学
- ・昭和19年、学童疎開で宮城県鳴子町に滞在する。
- ・昭和22年 文京区立第五中学校に入学
- ・昭和25年 都立向ヶ丘高等学校に入学
- ・昭和28年、東京薬科大学女子部に入学
- ・昭和32年(1957)、第五回生として卒業
-
- ・平成7年(1995) 世界中のソムリエが栄冠を目指す、三年に一度の「世界最優秀ソムリエコンクールコンクール」第8回大会で優勝した田崎新也に師事して、東京銀座の田崎新也ワインサロンに参加して、親しく指導を受ける。

温代さんの子供時代には戦争があった。

集団学童疎開から50年が過ぎて、太平洋戦争が激しくなった昭和19年から20年にかけて、宮城県鳴子町には、約6500名もの東京の子どもたちが集団疎開した。

街の人々が受入れに努力しましたが、食料の不足する苦勞の多い生活が続きました。

それから50年。いまも、疎開の記憶は鳴子へのなつかしきとともに

以下は鳴子町観光協会が1997年3月に発行したパンフレットから引用させていただいたもの

見知らぬ町、鳴子での疎開生活。それは忘れられない戦争の記憶になった。

昭和19年夏、子供たちは特別列車でやってきた

昭和19年8月、鳴子駅や川渡駅には、小学生を乗せた特別列車がきつぎと到着してました。東京都小石川区(現・文京区)、浅草区(現・台東区)からの集団学童疎開の子供たちでした。20学校、のべ6500名の大規模な疎開でした。子供たちは鳴子町、鳴子町中山平、川渡村(当時)、岩出山町の旅館などで授業を受け生活しました。

家を焼かれ、家族を失った子供たち

当初集団疎開でやってきたのは、国民学校3年から6年までの子供たち。昭和20年3月、6年生は中学進学のために帰京しますが、帰京の日が3月9日の東京大空襲と前後したため大きな悲劇となります。大空襲

食糧確保に奔走した町の人々

昭和15年当時、鳴子町の人口は約5100人、川渡村は約4800人。人口の3分の2に当たる数の疎開児童を受け入れるのは容易ではありませんでした。昭和20年に入ると、戦局の悪化とともに食糧事情はきびしくなっています。8月にはついに鳴子も爆撃を受ける事態となり、敗戦の日を迎えます。

第二のふるさと、鳴子

戦争のために親元を離れ見知らぬ土地で暮らす。それは子供たちの心に深い記憶や傷となつて残りました。しかし、ひもじさや寂しきの中で触れる鳴子の自然や人情はせめてものなぐさめでした。50年が過ぎて、折

りにふれ鳴子を訪れる学童たちがいます。鳴子は第二のふるさとであり続けているのです。それは学童にとっても鳴子の町の人々にとっても忘れられない戦争の記憶です。

学童集団疎開

第二次世界大戦末期、戦局が悪化しアメリカ軍の日本本土爆撃が危惧されるようになると、政府は昭和19年5月に「学童疎開促進要綱」を閣議決定し、学童の「緑故疎開」をすすめる、緑故のない児童については「集団疎開」を実施した。東京、横浜など大都市の国民学校3年から6年の子供たち35万人が、農村部約7000か所の旅館や寺院などの生活を余儀なくされた。さらに20年になると、疎開の対象となる都市が増え、学童も1年生まで引き下げられ、集団疎開の児童の数は45万人に上った。終戦後も疎開は続き、集団疎開からの復帰が完了したのは昭和20年11月になってからだった。



19年8月、鳴子駅に下り立った子供たち。不安な表情が見てとれる。

僕らは遠く疎開して僕らの知らない田舎にゆく
かうして僕らは山林や田野や海浜にゆく
かうして僕らは日本中の到るところに
散らばってゆく
やがてはその大切な運命をほくらの方にふたために
僕らは遠く日本中の山野に散らばってゆく
僕らは疎開の少年
祖国のけふの決戦にあづかり得ない小さな国民
僕らは疎開する
さらば元気に出発する
(三好達治「千光永言」より「僕らは疎開する」)
非戦後、三好達治はこの詩集を絶版したが、昭和40年筑波書房の全集刊行にあたって、編集委員の判断で第2巻におさめられた。

に、かつての学童たちの心に生きています。

昭和19年、米軍がサイパン島に上陸すると日本本土への空爆はもはや時間の問題となりました。政府は都市部に暮らす児童生徒の緊急疎開を迫られ、6月30日には「学童疎開促進要綱」を閣議決定、7月17日には「学童集団疎開実施要領」を発表します。緑故疎開先のない子供もまたは学校ごとに集団で疎開させられました。

8月4日には、第一次学童集団疎開200人が上野駅を出発。こうして鳴子にも東京から大勢の子供たちがやってきたのでした。

集団学童疎開は、東京をはじめとして全国13都市45万人が対象となりました。東京都は受入れ県と直接交渉に当たったようです。

鳴子町、川渡村(当時)にとって、のべ6500人に及ぶ児童の受入れのための最大の問題は食糧でした。政府からの配給は事務所を通して毎日ありましたが、それも戦争がきびしくなるにつれ、次第に不足していきまます。多くの旅館が独自に食糧確保のための努力を続けました。

親元を離れ、見知らぬ土地で暮らす。それは10歳前後の子供にとっては不安や心細さをともなうものでした。子供だけの集団生活のつらさも、特に低学年の子には身にしみて、とほしい暖房でのご寒さもありました。そして疎開といえれば必ず語られるのがシラミ。薬もなかった当時は、だれもが嫌というほどシラミに悩まされました。



夜、布団を並べて寝る。親を思い出し人知れず布団の中で泣く子も多かった。

昭和19年当時、小日向台町国民学校6年、鳴門村町の旅館金忠に疎開した秋田良吉さんは、出発のときから後輩の面倒を見ていたが、次のように語っている。

出発のときは大塚駅に集まり山手線で上野駅に出たんですが、おかあさんたちが見送りにきていて、6年生の僕らは「うちの〇〇をよろしく願います」って頼まれました。「はい、はい」なんて、よく言つたと思いますよ、自分だつて心細いの。荒川渡つたあたりからシクシク泣き出すのがいてね、なだめるのが本当につらかったです。宿では6年生が班長になって下の子の面倒をみました。センチメンタルな子がいてね、夜になると窓を開けて「おかあさん星が光つてたわかった、もう寝よう」って。疎開中、下級生が一人肺炎でなくなりまして。川向(こう)のお寺でだに付したんですが、それが旅館から見えます。怖かったですね。自分たちもそうなつてしまふのではないかと思つて。

